

No Book No Life No.1 2023.4

新学期がスタートしてあっという間に1か月が過ぎようとしています。

高生は毎日本当に忙しいと思いますが、時間を見つけて本を読んでもみませんか？

今回は新しく本校に赴任された先生方のおすすめ本を紹介します！



伝統も、革新も
Since 1897



新着任の先生 押し本

小西 弘通 教頭先生

『夕凧の街 桜の国』

こうの史代著(双葉社)

図書館にあります



この本は漫画ですので、簡単に読むことができます。原爆投下が戦後にもたらしたものを中心に描いています。大きく3話から構成され、1話は被爆者の10年後を、残りの2話はその次の世代を扱っています。主人公そしてその家族の生活、思いや考え、苦悩等が感じとれます。ぜひ、この本を読んで、戦争、そして平和について考えてみてください。

平川 哲也 先生 (理科)

『スイス文学叢書 物理学者たち』

F.デュレンマツト著(早稲田大学出版部)

デュレンマツトは1921年生まれのスイスの劇作家である。つまりこれは戯曲の紹介である。演劇部の顧問をしていたこともあり、演劇×物理というかなりたまたまな出会いで読んだ。演劇は基本的にはすべてのシーンを描かず、ある時ある場所での人のやりとりを凝縮する。また、演劇の設計図という構造上、内面の心理描写は一切ない。ある人間の行動に何を見るか、そこに面白さがある。

長谷川 太一 先生 (英語科)

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディみかこ著(新潮社)

図書館にあります



数年前に読みました。アイルランド人の父と日本人の母を持つ「ぼく」が過ごす中学校生活についての物語。英国での生活についての話から、世界に蔓延る社会問題について考えさせられます。私たちが住んでいる日本にはほとんど日本人しかいません。日頃他の人種の人と関わることは特に我々群馬県人にはない経験です。ぜひ、将来世界に羽ばたいていく皆さんに読んでみて欲しい一冊です。

笠原 宗太 先生 (体育科)

『クライフ哲学ノススメ』 木崎伸也/若水大樹著(ガイドワークス)

FC バルセロナサッカーの土台を作った故ヨハン・クライフの戦術本である。また全盛期のFC バルセロナやオランダのサッカースタイルを言語化したものであり、非常にわかりやすく説明している。少し古い本にはなるが現代サッカーの戦術が詰まった本であり、今見ても見応えのある本となっていると思います。

登坂 結子 先生 (事務)

『冒険の書 AI時代のアンラーニング』 孫泰藏著(日経BP)

「僕らはなぜ勉強しなきゃいけないのか？」

「自分らしく楽しく生きるためにはどうすればいいのか？」

君が気付けば世界は、変わる。80の「問い」から生まれる、「そうか！なるほど」の連続。いつの間にか迷いが晴れ、新しい自分と世界が始まる。思わず手に取ってしまった1冊です。カバー絵も素敵です。

小林 裕貴 先生 (数学科/柔道家)

『AX』 伊坂幸太郎著 (KADOKAWA)

図書館にあります

「心優しい殺し屋、兜」…この矛盾する響きの言葉がびたっと当てはまる主人公に出会うことになる。

彼は恐妻家、妻の一挙手一投足に神経を研ぎ澄ませ「最善」を尽くす。それを鼻で笑う息子。

読み進めると、主人公の兜がどうしても自分に重なり、こんな殺し屋ならなってもいい…などと空想も楽しい。

